

2013年サケ・マス類

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数 量											年 末 在 庫	日 露 協 定	秋 サケ	北 海 道	本 州	
	漁 獲 (生 産)			加 工 塩 蔵	輸 入 生 冷	輸 出 生 冷	東 京			缶 詰	消 費 支 出						
	サケ	マス	養ギン				生	冷	塩蔵		生(㊦)						塩(㊦)
24	128.5	5.9	9.7	93.8	269.4	21.6	8.1	35.4	10.8	2.4	3,135	1,579	106.0	9.6	121.8	107.7	14.1
25	160.1	6.7	10.1		249.1	32.9	7.2	34.8	11.0		3,058	1,652	94.7	5.4	154.6	129.5	25.1
%	125	114	104	0	92	153	88	98	101	0	98	105	89	56	127	120	178

年	価 格									
	秋 サケ	北 海 道	本 州	輸 入	輸 出	東 京			消 費 支 出	
						生	冷	塩蔵	生(円)	塩(円)
24	467	461	516	538	285	799	465	680	4,254	1,937
25	423	432	375	620	254	1,001	606	747	4,212	2,031
%	91	94	73	115	89	125	130	110	99	105

漁 獲 量

25年の北洋サケ・マス漁業は、ロシア200海里枠が中型船2,520トン（前年：3,796トン）、小型船2,850トン（前年：3,275トン）で中型船、小型船とも減少した。入漁料は中型・小型とも298円/kgで前年（304円/kg）並みであった。また、割当枠はベニ、白とも減少した。またオホーツク建マスは不漁だった前年を上回ったが、水準としては4800低かった。

日本200海里枠は上限が撤廃された。前年（カラフトマス主体2,562トン）

秋サケ沿岸漁獲量は、北海道3,869万尾（前年：3,475万尾）、本州838万尾（前年：508万尾）、トン数では北海道13万トン（前年：10.8万トン）、本州2.51万トン（前年：1.41万トン）であった。北海道、本州とも好調で前年を上回り、特に本州では倍近い漁獲となった。

価格は、当初は今年もイクラ在庫の払底もありやや高値推移であったものの9月以降、漁がまとまり始め、好漁が決定的になった10月からはやや下げに転じ、結果的には昨年を下回った。しかし水揚げ増加も目立ったことから今年の漁獲金額は再度500億円を上回った。また本州でも当初から昨年を上回る漁獲がみられ、捕獲尾数が伸び、結果的に前年を大きく上回る水揚げとなった。価格は北海道の後半の下落基調になってからのスタートであり、北海道に比べかなりの安値となった。

魚体は、北海道3.35kg（前年：3.10kg）、本州2.99kg（前年：2.77kg）で、今年は北海道、本州とも前年より大きく、一昨年並みの魚体に戻った。

国内養殖銀ザケは、東日本大震災による被害から立ち直る兆しがみえ10,100トン（前年：9,700トン）まで回復した。

輸 出 入

25年のサケ・マス類輸入量は、24.9万トンで前年（26.9万トン）をやや下回った。

本年、天然ではベニが前年をやや上回ったが、養殖物では主力のギン、トラウト、アトランが何れも減少であった。また、冷凍フィレーも引続き前年を下回った。その結果、総輸入量は前年を下回った。

天然物の国別輸入量は（全てのサケ・マス類、フィレーを除く）、米国4.7千トン（前年：9.7千トン）、カナダ1.2千トン（前年：1.2千トン）、ロシア3.5万トン（前年：2.5万トン）

でロシアが引き続きかなり増加したが、米国は本年もアラスカベニの低調さもあって半減、カナダが本年も昨年並みと低調であった。

また、1999年初めて米国をぬいてトップにたったチリを始めノルウェー等各国からの養殖系サケの輸入は、既に天然ものを遥かに凌駕しており、末端消費も養殖系のギン、トラウト、アトラン主体の流れになっている。本年の国別輸入量はチリ11.8万トンで前年(14.9万トン)を下回った。ノルウェーは2.4万トンで、前年(3.1万トン)を下回った。またニュージーランド(生・冷)、デンマーク(生・冷)、オーストラリア(生)等からの輸入は引続きみられているが、量的にはチリとノルウェーからが圧倒的に多いことには変わりはない。

輸入価格は、620円で養殖系さけの生産減少と米国紅サケの搬入減少も上昇し、前年(538円)を上回った。

また、近年まとまった輸出がみられていたアキサケは、国内生産の減産と原発事故の影響で中国への減少が顕著にみられていたが、本年は2.1万トンと前年(1.1万トン)を大きく上回り回復しつつある。

輸出先は、依然中国が多いがそのシェアは64%まで回復した。続いてタイ5,601トン(前年:5,627トン)、ベトナム4,685トン(前年:4,103トン)、韓国45トン(前年:20トン)、台湾89トン(前年:2トン)でタイ、ベトナムの健闘が目立った。

また輸出価格は、本年も国内アキサケ価格の下落もあって、前年(285円/kg)をやや下回る254円/kgであった。

総供給量

本年は、沖獲りがかなり減少、建てマスがやや増加、秋サケも増加、養殖ギンもやや増加、輸入・輸出とも減少した結果、総供給量は、ほぼ前年並みの49.7万トンとなった。年末在庫量は、供給量は前年並みであったが、養殖系の供給源を単価的に安い秋サケが補った格好になり、消化も順調に進んだ結果、昨年をやや下回る越年在庫となった。

	24年	25年	対比(%)
総供給量	499,384	497,069	100
沖獲漁獲量	9,633	5,370	56
秋サケ漁獲量	121,800	154,600	127
建マス漁獲量	3,100	4,800	155
銀ザケ漁獲量	9,700	10,100	104
輸入量	269,400	249,100	92
期首在庫量	107,351	105,999	99
輸出	21,600	32,900	152

消費地入荷量と価格

サケの東京消費地入荷量は、生7.2千トン(前年:8.1千トン)、冷3.5万トン(前年:3.5万トン)、塩1.1万トン(前年:1.1万トン)であった。

本年の入荷の特徴は、北海道・三陸の秋サケ漁が久しぶりにやや好漁と前年から生産回復した銀サケもやや増加となったが輸入物養殖物の減少で生鮮の入荷は減少した。冷凍原料もチリ銀の国内搬入が下半期は減少となるものをほぼ前年並み、塩蔵もほぼ前年並みで推移した。

平成年代に入って順調に伸び定着してきた生秋サケは、切り身、生フィレーでの販売が既に全国的に定着している。しかし、輸入養殖物(トラウト、アトラン)の減少もあって、生

系は減少し、この傾向は家計支出にも反映され生は数量・金額とも微減した。

価格は、生1,011円（前年：799円）、冷606円（前年：465円）、塩747円（前年：680円）で原料の高値が反映し、生鮮・冷凍・塩蔵とも上げた。主な要因としては、ギン、トラウトを始めとした養殖系の減産、世界的な需要の増大の中で、価格上昇が続き、この結果が国内サケ市況にも影響を及ぼし、産地、消費地のサケ価格は好調だった秋サケを除けば、総じて特に上半期以降堅調に推移した1年であった。